

王国

まばらな果樹の潮枯れの地に
胸とよもすなつかしの風が吹き寄せ
（どうにもできない自然）の姿なき声が 旅の終わりを告げるのを知ると
わたしらは草葉の馬や
苦い根をうつ唐棹を擱き、腰を伸ばして
段畑のきりぎりしから杲然と沖を見遣る
黒い巖の怒りに凝った波の山塊が水平線の彼方にひとつ、またひとつ
天を突く蓬髪を無言でめりめり駆り立てながら遠眼鏡に覗く別世界の風景のように
風化の岸の
辺土めざして起ち上がる
波打ち際ではすでに守りの最前線は破られ、防波ブロックは堤の上に投げられて
気まぐれな波の発作の指先になぶられている
小屋にもどったわたしらは、出発の準備を整える
持ち出すものとてすでに甲斐なく
ただわずかな飲み水と赤茶けた蟹の、なけなしのところに似た戸惑う機械ひとつを連れて
断層の崖を這い登る
水の巖はいつまでも遠い
遠い風に見えて 次々にたぎり生まれ
水はいつまでも来ない
来ない風に見えて不穩の沖から押し寄せては碎け
昼下りの岩棚からま紺の尋に釣り糸を垂らし
世の終わりを臨み見る長閑な驕りに晴れて
崩れるひな壇もろとも逃げ遅れる眼下の者らを築地に彫られたレリーフの
泥人形のようにゆったりと呑み込んでいく

すべての希望が一幅の戯画にすぎず
わたしらではない
翼をもたない
蟹のように自由でこわれやすい魂のなけなしの親しさだけが
守り通すべくもない
惜しむべきただひとつの最後の無垢
古い徽章に飾られた
今は亡き者たちの集い遊ぶ
木造兵舎の屋根屋根を越え
新しい教義に目覚めた祭主の棲む
金箔の寺院を越え
うねうね続く唱名踊りの
影深い谷を見下ろす山窩の宿りを穢し
飢えながら死にながら殺しながら いとしい死を抱きしめながらわたしらは逃げる
おどけた破滅を配る荘園の似姿をもとめて
見えぬ姿で踏み迷う疎林の藪に
体液はさらさらと血のかどをめぐり、分厚い水の神慮を呼ぼう
水は積み重なる迷宮の謎でどこまでも追いかけてくるだろう
苔むす絶望の河も
影馳しる執着の台地も
すべてはみせかけの玩具
飽くことを知らない緻密の触手はやがて生けざるものらの階梯を埋め
高処という高処を犯し
世界は渺茫となめされていくだろう
星のすな絵またたく 満ち足りた幾千年のねむりのあと
ある日 にび色の雲のはざまに
燃焼のちを燦爛と運ぶあの醒めたなつかしい風に似た
光り輝く無人の家がその姿をあらわすまで

第3回「文芸思潮」
現代詩賞
当選作

富哲世



とみ てつよ
1954年神戸生まれ。獅子座 O型。
詩集「血の月」(蜘蛛出版社 1993年)
詩集「天人五衰」(ルナ企画 1999年 私家版)
詩集「殺佛」(ルナ企画 2000年 私家版) 他
歌集「死明」(窓月書房 2002年)
評論・他「スペイン内戦とガルシア・ロルカ」(共著 南雲堂フェニックス 2007年10月)など
現在詩友たちとやっている月刊研究誌に月評と詩を連載している。所属同人誌等なし。

受賞の言葉 富哲世

晩学にして浅学の身としては、詩の未来の展望を見定めるところか、その幻影の後姿を垣間見ることすらとてもかなわないうが、若し詩の魅力とは何かと問われれば、現れる作品としてまた情況としても、詩の持つ多彩さであると答えたい。幾人かの傑出した才能によって展望が齎され、優れた詩論や詩学が日本の詩をリードすることがあっても、あるいは優れた作品が詩の一時代を画するということがあるにしても、作品の現れの総体の中でそれらは相対化されていくように、撒播の土壌から詩は常に多彩に立ち上がって来るのだ。その多彩さに触れていくことはとても楽しい。

一編の詩の実現は、相反する答えを同時に孕む行為であるように思える。詩のことは、伝統や美の規範の支配に執拗に抗いつつ、しかも自らそれに続くものであることを欲望する。詩の意識は、埋没的な日常を激しく憎みながらも、日常の持つ一期一会の陰影への細やかな視線のなかにこそ、詩の命が育まれていくことを知っている。それらはすべて、人の営為のラジカルな多彩さの証明にほかならないだろう。

今日詩を書く者の多くは孤独に、あるいは僅かな盟友とともに自らの詩作の磁場を拵えている。詩を書く者は独力でことばと格闘しながら、常に自身であることの場合に飢えている。此の度のわたくしの受賞が、みおつくしのひとつとなつて、少しでもそういう書き手たちの飢えを充たす励みに役立つてくれればと希う。



土田多良無季

禍根

殺意は竜巻か
兵士は蟻か匍匐する
近眼ゆえにか
近眼ばかりが召集され
視界は霞の只中で
命はごう毛程の確かさ
最期は最期で際限もなく
宇宙へは死臭だけが届く
エステルに酔わされていた等と
帰還船で語り合うのは
戦場妻たちだけではないはずだが

二等兵や少尉は
敗れるまで気付きはしない
大将や元帥は
気付いたことすら気付きはしない

先陣訓は「自決すべし」と
ふ虜をことさら禁じたが
火炎放射器で
焼かれながら生き残った者に
訓などは空念仏だ

死に損ないとしての負い目は被差別者
隠せることをすべて隠し
人肉食をも隠して

六十有余年

今日も明け方の夢で

白い群集に手招きをされる

「お前らは誰えなんじゃ」
妻も驚く寝言で覚醒する日々

九月で九十二となる

寝苦しい夜ども

しだたら むぎ

1915（大正4）年9月29日生まれ（92歳）
岡山県新見市出身 高等小学校卒
日中戦争従軍経験有
航空機製作会社、自動車制作会社勤務
定年前後の50歳ごろから、旺盛に詩作をしていた息子に触発されて、詩作を開始。遅筆のため作品は少ない。
同人誌に入るも原稿が遅いため出たり入ったりで腰が落ち着かず。現在の所属はない。
息子の言によれば、「時々記憶が消えていることがある」とのことであるが、いたって元気ではある。

紙の神に

おまえがくれた
瞳が
識別するのは
赤と黒と
真昼の
天空の
昂
お前がくれた
耳が
聴取できるのは
蟻の
鎌のきしみと
川ガラスのくちばしの
擦音

おまえがくれた
鼻は
言の葉の
腐臭と
ハンマーの発する
熱の暑さと
靈魂の冷たさを
かくこともできる
指向は
思考を超え
僕が作ったもの
義眼の
瞳
歌は流れているのか
心に共鳴する
歌は

受賞の言葉 土田多良無季

息子とは、二十八歳の差があります。その息子の詩作の活動に触発されて、五十歳ごろから詩を書き始めて、四十年ばかり詩を書き続けてまいりましたが、その多くはメモ書きの域を出ず、たいていは広告の裏に書きとめたり、印刷物の裏に書いたり、散逸いたしております。

「禍根」「紙の神に」「錦の座蒲団」は、たまたま息子に浄書してもらったので残っております。

「禍根」は、息子が、「戦争の記憶の消えぬうちに、何か書いておいたら」と勧めてくれたので、ボケの少ない時に、たどたと、一週間がかりで書いたものです。

「紙の神に」は、神のあふれる国の神を揶揄してみたくもります。

「錦の座蒲団」は、昔聞いた秘事について書いてみました。

体調の良いときはかりではございませんので、なかなか詩作も難しくなっていました。これからは、息子の力を頼りにしながら、創作活動となると思います。

最後の詩心の燃焼の成果として、冥土への土産ができました。ありがとうございました。

第3回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

溝口愛子



みぞぐち あいこ

1977年生まれ。長崎県大村市出身。国際情報科学専門学校 情報ビジネスコース卒。
川文夕鶴の筆名にて第二回現代詩賞で奨励賞入選。
2005年 長崎新聞社主催の文芸賞で佳作入選。(同年の1月18日の長崎新聞に本名にて掲載)。

就眠儀式

夢という夢に明かりが灯る夕べ
ヤマアラシが終の歌をうたうから
私の中の釣鐘草が黄金と陽の色に燃え上がる
頭皮に生えた無数の蔓草が激昂しながら夜空の点を捕まえるとき
私の獅子は暁色に燃え上がる

深夜の薄暗い便所で便器の傍らに膝をつき真っ黒い穴倉を覗き込む時
世の終わりと始まりを目の当たりにした
洞窟の壁面に夢という歪んだ文字を腐食した黒ペンで書き殴り書き続け遂には文字が文字ではなくなった
枕の内側に潜む羽根そっくりの夢を求めて脳の内側を食い破る
何故に部屋の中がこんなにも暗い
カーテンの隙間から差し込む一筋の明かりでさえも私の眼球を銀の針で貫くから
私は千切れそうな目蓋を死に物狂いで閉じたのだった

白い錠剤を電源の切れたポットの湯で暗い穴倉に流し込む
室内に充滿する悪鬼たちが恐れを含んだ目をして熱気とともに荒れ狂う
電気スタンドがテレビが本が本棚がビデオテープがパソコンがクローゼットが人形たちが
けたたましい声で笑い出すのは何故か
眠りが時折黒い手を伸ばして私を遠ざけるのは何故か

時計の秒針がカチカチ耳を鞭打つのは何故か
一粒の錠剤が脳内を駆け巡ったのに
未だシートが翻弄するのは何故か
目蓋の裏側で獣どもが歯を食いしばって囁くから
天井と床の合間の黒を指で掻き穿った
錠剤を投げ込みにポットの前へ走る
暗く蠢く喉の奥へ二つ目の錘を放った

受賞の言葉 溝口愛子

応募させて頂いたのは今回で二度目となりますが、一度目には奨励賞を頂いて窓の外をぼかんと眺めるほど驚き、そして今回は何と優秀賞を頂いて目が点どころか無くなってしまふほど驚いております。
詩を書き始めてまだ三年程しか経っておりませんが日々詩を読み、詩を書くという習慣をしつこく続けている次第です。

詩を書き始めたきっかけは詩人シルヴィア・プラスの存在を知ったことが大きかったのですが、こんなにも早く公の場で認めてもらえる日がこようとは想像すらしていませんでした。
私にとって詩は唐突と頭の中で鳴り響く言葉の風鈴みたいなものです。眠れない時に眠るための錠剤を歯と歯の間で押し潰す瞬間や、水を入れた冷たい水に手を浸した瞬間にも不意に訪れます。
自分の立ち位置すらもよく分からぬ私ではありますが今回光栄にも優秀賞を頂いたことで、詩に対する自分の成長を確かに実感することが出来ました。私の詩を選んで下さった審査員の皆様、関係者の皆様はこの場を借りて深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

第4回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

作品募集要項

趣旨●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る(3篇の場合まとめて送付のこと/添付別紙は全体に対して1枚のみでよい)。

応募資格●不問

応募規定

一篇は400字詰原稿用紙5枚以内(原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと/ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと(コピー送付が望ましい)。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL&FAX 03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金3万円

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金1万円

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作■賞状・記念品

選考委員●河林満・池田康・五十嵐勉

締切●2008年5月31日(当日消印有効)

発表●1次予選通過作品は2008年9月発売の「文芸思潮」25号に発表。

受賞発表・作品掲載は11月発売の26号、およびインターネットに発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。

水に、眠る

衣服を着用したまま浴槽に沈む

水面擦れ擦れで目を開けると空間が歪んで見えた

朝方の青が差し込む時間は空気中に魚が舞っているから不思議

右手を揺らめく羊水から差し出すと魚が指の先に寄ってきて口づけをする

鈍色に光る剃刀は水底に沈んでいる

お前は私の左手首に口づけしようとしているがそうはいかないよと嘘ぶく

皮膚の中の血管が透けて見えるから不思議

青い枝の絡まりが林を作って私を閉じ込めるから

羊水の外に未だ出られないでいる

剃刀が浮上してきて私の頬を撫でた

刃は労わるように皮膚を裂くから

いつまでもそこから私は動けずにいる

薄い肉の塊で出来た容器が機能停止の時刻が来るのを心待ちにしている

だから剃刀は濁った声で笑いながら洗面器の中へ身を投じる

浴槽の水から出る明け方

フロアリングの床を爪先立ちで歩く

続く帯状の水滴は

おぞましい沼の精が残す痕跡

前髪の前から落ちる滴りは剃刀が残す嘲笑い

またも絶てなかったことを

水たちが囁く

囁きは連鎖する

私の呼吸の内へ

喚き狂いなじっている
髪を掴んで逆立てると
鏡の裏で黒がざわめく



第3回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

佐々幸子

トツカリシヨ

胸の鍵穴に 鍵を差し込んだまま
太ったトドが 海を拭いています
海が きれいになる分だけ
夕日が 透けてみえます

船底に膝をついて
未知の海底の赤い血を盗んだのではありません
大海原の精気を盗んだのではありません

内側の燃える炎を静めるために
闇がほんのすこし めくれただけです

トドよ トドよ
屹立するガンケから 突出する骨を
滅びを遮断する 険しいガンケを見ましたか
裸足になって手さぐりで

貧しさという位置から信じる時間を知りました

研いだ渾身の斧で削った 断崖絶壁にやっと降り立ったとき
オッカナクテ目を瞑り 這いつくばって

カムイへ ひれ伏して 祈ることをしりました

沈む陽を 胸から掬って

火の色の鍵を 海に差しこみました

『ビンタを張りたい 夕焼けです』

白いハンカチ畳み損ねて 羽を広げたカモメの親子

ダイビングに備え身を反らせるトドの群れ

沈むとみせて海辺がもやって 朱が朱を呼んで

黄昏を 反転させます

北の国の知恵ある先人が呟いた

この岬の上で

この薄くれないの 暮色のなかで

『オイナを謡った』

目／灯台

目の奥に穴がある
深い洞窟だということが
その静けさでわかる

二重まぶた
やさしさを目深にかぶった
めんこいなまえ

こんこんと湧く泉がある
澄んだ水だということが
その瞳をみればわかる

人はときどき船を漕いで
心の入り江を出たり入ったり

むんつける悩みやら
落ちるぞとみがまえて
ざぶんと海

やっぱり室蘭は目がわるいね
見つめ合うために

風がメガネをかけているよ
洞窟の中は海だね
目の中がいつも濡れている
うん
四方八方 ずっと ずっと 海
さみしさを しんしんとつもらせて
晩春の
地球岬
濃霧

受賞の言葉

佐々幸子

海が好きで、四方八方海に囲まれた室蘭で50年近く住んでおります。祈りながら、いつも遠くまでの航海を夢みている心はいつも放浪者です。

過年、ウタリ協会の皆様と一緒させていただきまして舟で沖へ出ました。息をのむほどの海岸線の美しさと、恐れおののくほどの厳しいガンケに鳥肌がたちました。

この果てしない海の上の人間の小ささに。海の広さに。この世の広さに。海底の深さに。知らぬ人生の底知れなさに。震えてしまいました。

「トツカリシヨ」を選んで下さった先生ありがとうございます。嬉しかったです。どうしてだか少し泣いてしまいました。感謝です。

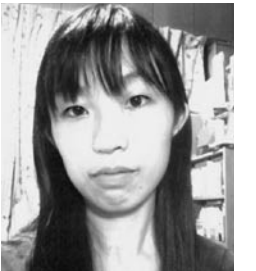


ささ さちこ

昭和8年9月5日生まれ。74歳。
故郷はと聞かれたら岩手県と答えます。大好きだった祖母と暮らした幼い日々が私の故郷です。
高校卒業後、市役所、地方新聞社、会計事務所 勤務

第3回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞

斎庭京志



ゆにわ きょういち

1987年6月生まれ。
熊本県立第一高校卒業、現在自宅にて大学浪人中。
尊敬している詩人は宝野アリカ・佳宵布由。
HP <http://blackplum-salome.fool.jp/>

虚ろふ紙芝居少年

あなたのこの薄い背中には
硝子で編まれた蝶々のはねが潜んでるのでは
なくって
もう既に一瞬のちの未来が
鬼のことばで書いてあるのよと
矢がすり袖で唇包んで
見知らぬ婦人は囁いた
どんな色した洋墨で
つぎのわたしが描かれて
どのくらいの筆圧で
塗り込められてるのか

誰が水館を練りながら
微動だにせず見入っているのか
握る硬貨すらびいだまにかわって
私の眼窩で軽やかに
あかしろみどり
安っぽく踊る
ああ
怖いから
まだいますこし
後生ですから
次の紙を
めくらないで！

からころろん
あなたの薄い背中には
硝子で編まれた
蝶々のはねが潜んでるのでは
ない
もう既に一瞬のちのことが
鬼のことばで書いてあるのよと
やがすり袖で唇包んで
見知らぬ婦人は囁いて
懐筆をそうつと探り
そうしてこうしてもとどおり
うしろにまわって影になる

想ひ出煙草

さいごに
老人たちが艶やかにわらって灰皿へ伏せた夢の吸い殻を
墓守りのおれはひそかに一本つまみ
だして
眼球にくわえ
瞳ですうとのんでみた
ああ
かわいらしいセーラー服のえり
愛した唇
鳥居の下をくぐる子らは
まだ畏敬なんて言葉をしらずに
鬼ごっこをし
縁側
碁盤の遙かうえ夜に一手打たれた
会心の
月
その晩は後手のかちだったのだ
夢吸い殻は
ほんとは墓の廻りのただの細草だ
彼らが得たあらゆる素敵なものをふくんできて
おれにとっては魅惑的な
心痛む毒だ

これまでろくな生き方をしなかったおれは
爺さんたちの最期の夢のおこぼれを頂いて
羨んでは
狂ったように石碑を拜む

受賞の言葉

斎庭京志

昔から本の虫で、中学から放送部で朗読をしていたこともあり、言葉というものが大好きです。が、文章を書いても出すのは常にHP（幾つか持っています）上のみ、高校で掛け持ちで文芸部に属した時期でも短編小説一つを部誌に載せたきりであった為、自分の言葉が他の人、特に大人の方にはどう伝わるのか解らない状態でした。今回拙いとは言え詩を褒めて頂けたのは、だから嬉しいけれど意外なことでもありません。ところで応募した作品は揃って薄暗い詩ばかりですが、書いている間は端から見たら気持ち悪い程「ハイ」な気分です。

もし身体の中が疼いて頭に言葉が浮かんだら、書いてみることをお勧めします。それはきつと頭上の自分からの天啓です。夜に書いた手紙のようなものでとりとめのない文面が多いことと思いますが、きつとそれには素晴らしい詩になる可能性が含まれているのでしよう。自作を今になって読み返すと恥ずかしい部分、こうすればよかったと反省する部分は幾つもあるのですが、それはそれで良い思い出になりました。詩を書くにあたって気をつけていることがあるとすれば、それは「世界を持つ言葉」にする事です。

言葉に世界を作らせるのではなく、世界を言葉に持たせられるものにしたのです。自分に課すには難しいテーマですが、妙に心地よい足枷なので愛用しようと思います。

原爆ドーム

この土地は時の中心にあるべきだ
この場所は空間の中心になるべきだ
この建物は魂の中心にもなるべきだ

絶句の時——その刹那

風景は反転し落下したまま凍りついた
この極限の不条理を誰が受け入れるのか
うららかな春の日に凍えはいまだに溶けず
そこには憤怒と涙の河が流れていた
瞬時焼き尽くされた生命たちは安らかになんか眠れない
沈黙の抗議は黒いドームのなかで赤々と燃えている

ドームの内庭の瓦礫にはドクロの残映が光っているし
レンガの壁には若い男の眼差しが張り付いている
その前の空間には髪の毛の長い女の影が風と重なっている
微風の春の午後だというのに
英霊たちは安らかになんか眠れない
赤い涙の河が時空に漂っているかぎり……
瞬時に焼き尽くされた極限の不条理があるかぎり……
究極の空洞を修復する術を誰も知らない
誰が花束をささげても赤い河は消しえない
凍えたまま虚空へ向かって流れている

そして人類に向かって指を指す
その余りに深い罪の意味を——

にも拘わらず世界の地図に血の乾く暇もない
憎悪は人のどこに潜んでいるのか

貧困や偏見の谷に眠っているのか
その萌芽はどんな動機で発芽し成熟していくのか
憎悪はどこからやってくるのか
途方もない人の自我への執着からか
その果てない心の煉獄はどこへ向かい収斂していくのか
けれど果たして鳥たちは憎悪を創りだすだろうか
けれど果たして獣たちも憎悪を貯えるだろうか
たとえ雨の恵みがなく飢餓にかられたとしても
彼らは不平も言わず苛酷な自然を受け入れて
いる
むろん武器など造らず心の煉獄も知らないだろう

この建物は武力の究極の残骸
凍えた抗議が時空に流れている所

私たちはこのドームの只中にひざまずき
憎悪の芽を自我の内側に折り込んで
慈愛の祈りに向き合わなければならぬ
この土地が時の中心にあるべきだから……
この場所が空間の中心にあるべきだから……
この建物が魂の中心になるべきだから……



第3回「文芸思潮」
現代詩賞
優秀賞



ふくだ・しずよ

1947年東京生まれ、東京育ち。
学習院女子短大卒業後、東急航空へ入社。突然、虚構の世界に
真実性があると錯覚し舞台芸術学院（夜間部）、劇団NLTに
在籍するが、協調性と体力に欠け挫折。その後、フリーで機関
紙編集に携わり、彫金と七宝焼き等の工房を開設する。この間、
手描き友禅を習得するために、一年余京都へ行く。
詩を書き始めたのは小学校の頃だが、表現手段として取り組ん
だのは23才の時から。詩集は1975年「i f 画廊」、1980年詩
集「逆流の紅蝶」、1983年詩集「四言」、1992年詩集「落下風
景」、1993年「飛鳥へ」等を私家版で創る。
1993年から夫の仕事の関係で岡山、広島へ転居。

受賞の言葉

福田静代

振りかえれば、長年飽きもせず詩を書いてきたと思います。けれど、詩作に支えられてきたのは私の方だった様な気がしています。十代の終わり頃、私は九死に一生を得た体験があり、元来単細胞だった私の人生観は一転して陰影を宿し、死が自分に向かって的を絞っているような感覚が離れなくなりました。いわば、不安神経症のスパイラルに陥ってしまった私の精神状況のバランスを整えてくれたのが、詩の存在であったように思えます。

詩「原爆ドーム」を自動速記的に書いたのも奇異な体験に引きずられたからでした。数ヶ月前、某大学の通信過程の課題のため、資料収集として現場を訪れた訳ですが、ドームに近づくにつれ、訳もなく涙が溢れてくるのです。その後、その訳を理解しました。私が資料として撮ったものは、どうも心靈写真のようでした。この時、私は被爆者の絶望的憤怒と悲しみを記述したいと思ったのです。

「鬱病女の綴りごと」は、等身大に近い私の心境に芝居風の構成を試みてみました。

詩は評価を求めるために書いているのではないと自戒はしていますが、組織にも属さず自分だけと対話していると、孤立感と停滞感を感じざるを得ません。けれど、今回私の作品に対し、少なからぬ御理解を頂けたことで私も心を抜け、また、先へと進めそうです。今後、年齢を重ね老いを迎えた時、そこからは本来的真実の入口と自負し、その深く険しい森と峰へと分け入ろうと思っています。

鬱病女の綴りごと

「手首を切れば簡単よ。もし悩みがあるのなら……」
とあの女が言った

綱を手で握りしめ人生を投げずにたどり着くのはどこ？

たどり着いたとして、そこに何をみつけるの？

砂で練り上げた成功という名の虚妄をか

フリルにつつまれた大儀という名の偽装をか

あるいは桜色した幸福という名の欲望をか

さあ！ それらに手が届くよう恥を掻き消して

人生を投げないエチュードに励もう！

老いも若きも人生のレールから脱線しないよう……

他人は誰も振り向いたりしない

落ちゆく者のすがたなど

他人は誰も聞いていたりしない

堕ちていく者の悲鳴など

他人の人生は他人のものだから

「手首を切れば簡単よ。たとえ悩みがあったとしても……」

あの娘は言う

柩はいつも出発する

この時に また次の時に向かい

時は口を開いて命を吸いこむ

不毛な柩！ 滑稽な消耗よ！

誇りあるものは虐げられ

権力の膝に屈する者に酒宴は用意されている

美しきものよ！

おまえは腹黒い嫉妬と打算に食いつくされる

この世は柵に囲まれた養鶏所のようなもの

この場から誰も逃れられない

はかなき夢の闘争よ

綱をたぐり山の峰に登り

いったい何を犠牲にするんだらう

桃源郷こそがエゴの罫でないと誰が言えようか

はかなき夢は夢をかさね

幻はまぼろしの山々を創っていく

たんなる欲望の残骸に人は惑い

めくるめく至福の闇夜に己を晒す

「手首を切れば簡単よ。もしも悩みがあるのなら……」

だけど、わたしはまだ死なない。死ねないわ」

とその女は謎めいて微笑んだ

第4回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格とする）

応募資格●不問

応募規定●400字詰原稿用紙5～10枚（原稿用紙使用の場合は必ずA4原稿用紙を使用のこと）。

ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記のこと）②タイトル③本名およびペンネーム④年齢・生年月日⑤〒（必ず郵便番号を明記のこと）住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらが厳守されていないものは失格となる。

応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取ったうえで送付のこと（コピー送付が好ましい）。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL & FAX 03 - 5706 - 7848

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●エッセイ賞■賞状・トロフィー・賞金3万円

優秀作■賞状・賞メダル・賞金1万円

奨励賞■賞状・賞メダル 入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・福岡哲司・水木亮・五十嵐勉

締切●2008年4月30日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2008年7月発売の「文芸思潮」ウェブ24号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終発表・受賞作は2008年9月発売の「文芸思潮」25号（秋号）に発表掲載。優秀作・奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●アジア文化社「文芸思潮」

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、短い文章でなければできないあなたのエッセイ作品をお寄せください。